

アンドレ・ブルトンにおける超現実の身体論的解釈

加藤 彰彦

[要旨]

アンドレ・ブルトンが『シュルレアリスム宣言』において提示した超現実という概念はそれ自体についての言及が少なく、そのため我々はブルトンの他のテキストも含めて超現実についていかなるものであるか、特にその場所について明確にすることを試みた。この前提にはボードレー尔的な「ここではないどこか」が想定されるのであるが、そのような外的世界ではないということがまず明らかとなる。次に超現実の理論的根拠としてブルトン自身明言しているようにヘーゲルの弁証法があるが、これはシュルレアリスムのイメージとして結実することとなる。ここで考え方を変え、超現実のもととなる夢と現実のうち、夢から出発して超現実に辿り着くという試みにおいて、夢を現実的なものへと移行していく過程で、夢に似た<第二状態>が考えられるのであるが、これは人為的所産であり、自然な形でブルトンの求める二項対立の解消を理論的ではなく現実のものとして可能にするのは愛によってであり、そしてこの二項対立を解消した至高点を認識し得る愛が存在する身体こそが超現実のありかであることを論証した。最後に、この身体を一つのユートピアと見なすメルロ・ポンティの世界観は、愛によらずとも幸福という感情によって成立するのではないかと、結論部分において示唆した。

[キーワード]

超現実、夢、至高点、愛、身体=ユートピア

序章

1924年に当時の前衛文学書出版社であるシモン・クラ書店から刊行されたアンドレ・ブルトンの『シュルレアリスム宣言』には、この『シュルレアリスム宣言』を含めてブルトンの全てのテキストにおいて、恐らく唯一のと言ってもいいくらいである超現実についての定義らしき箇所がある。「夢と現実ということなのだが、見かけは非常に矛盾したこれらの二つの状態の、一種の絶対的現実、もしこのように言うことが可能であるとすれば、超現実(下線原文)への変化を私は信じている。」(PI p.319)¹⁾

このすぐ後に、「私が向かうのはその獲得であり、そこに到達することはないと確信しているが、自分の死にあまり思い煩わされることがないので、このような所有の喜びを少しでも推し測らないで済ますことはできないのである。」(PI p.319)と書かれているくらいであるから、超現実とは求められればすぐに手の届く所にあるものとは思われないのであるが、それにしてもおおよそのところ超現実とはいかなるものであるのか。超現実の前提として「見かけは非常に矛盾したこれらの二つの状態」である「夢と現実」が存在するわけであるから、超現実も我々の意識の対象となり得る外的な世界ではないかという見通しを立てることも可能なのである。

もっともこの夢と現実という全く違った二つの状態とはいいながらも、現実の日常生活における区別としては睡眠時に見るものが夢であって、覚醒時に展開され我々自身が存在するところが現実であるという認識があり、それ程の困難をその区別について感じることはないのであるが、これを哲学的に厳密に捉えようとすると、例えばデカルトが遭遇した困難に出会うことになる。デカルトが方法的懐疑を通して到達した有名な第一原理である「我思う、故に我在り」に至る過程で、夢の心像と覚醒時の心像を区別することの困難が表明されることになる。デカルトはこの問題の解決策として、夢の整合性の欠如という点を指摘して夢と現実を区別しようとしたが、十分な解決とはなっていない。確かに我々の感覚からしても、夢の中においてこれは夢であるという認識は通常ないのが普通であるし、今我々が存在している現実が夢ではないという根拠を提示することは困難であるに違いない。そしてブルトン自身この問題において自覚的であって、『通底器』で夢の問題を考察しながらパスカルに言及するのだ。「誰も根拠がなければ起きているのか寝ているのか確信を持っているわけではない。睡眠中人は実際に起きている時よりはあまりちゃんと起きているわけでもないと信じているのではないのだから…従って我々自身の証言によって睡眠中に過ぎていく人生の半分は…我々が起きていると考えているこの人生のもう半分は最初の、つまり我々が眠っている時にそこから目覚める眠りと少し違った眠りではないかどうか誰が知ろう」(PII p.179) もっともブルトンはこの種の議論については懐疑的であって、我々がごく日常的に夢と現実を区別している立場に立っているのだ。つまり、「この論理は、有効であるためには、まずためらいつつも睡眠中に起きていると信じるなら、起きている時に眠っていると信じることを要求するだろうし、この後の幻想は最も異例なものに属するのである。(中略) 睡眠と覚醒とが人生を共有しているのはそれでも尚明白であるのだから、睡眠の得になるようなこのごまかしは何故なのか。」(PII pp.179-180)

このようにブルトンは夢と現実を明確に区別した上で超現実という概念を提示するわけであるが、それでは夢でもない現実でもないという「第三の状態」とは一体いかなるものであろうか。この点についてブルトンは明示しているわけではなく、とはいいつつもテキストを詳細に検討してみるならば、ブルトンの思考の過程を辿っていくことが可能なのであるが、それでも我々の理解する範囲内においてという条件を付けなければならないだろう。そしてまたそのような判断は『シュルレアリスム宣言』を含めながらもブルトンの他のテキストを比較検討し、全体的に捉えた上でおよそのところを推察し得るわけであって、超現実という概念が提示された『シュルレアリスム宣言』に限って議論を進めるならば、そこまで明言することは恐らく不可能であろう。あるいはむしろ『シュルレアリスム宣言』を対象を限って超現実とは何かについて検討を加えていくなれば、超現実と考えられるのではないかと思われるものはいくつか見て取れるのである。まず『シュルレアリスム宣言』のほぼ冒頭において提示される「自らの幼年期」(PI p.311) である。確かにこれは過去の自分に関して成立した世界であって、現実に他ならないわけであるが、既に遠い過去となった現在の自分から見返してみるならば、それこそ夢のような世界なのである。ブルトンの表現を借りるなら、次のようなものである。「もし正気を失わないでいるなら、いかに訓練係の世話によって台無しにされていたとしても、それでも尚魅力に満ち溢れているように思われる自らの幼年期に、その時にはさすがることしかできな

い。そこでは、よく知られたあらゆる厳しきの欠如が同時に送られるいくつかの人生の見通しを残しておいてくれるのである。この幻想に深く根を下ろし、最早あらゆる物事の一時的な、極端な安楽さしか認めようとしない。」(PI p.311) 全ての人にとって「自らの幼年期」は存在するのであるから、「自らの幼年期に帰れ」というスローガンを立てることによって、事は解決するはずである。しかしブルトンはこの幼年期の素晴らしさに言及したその直後において、次のように書いているのだ。「しかし人はそんなに遠くに行けないのも本当のことで、単に距離の問題ではないのだ。脅威は蓄積され、人々は譲歩し、征服すべき領土の一部を諦める。限界を認めていなかったこの想像力、人は恣意的な有用性の法則によってしか最早この想像力に行使されることを認めない。この想像力はこの劣った役割を長い間引き受けることはできないし、二十歳頃には、一般に、人間を明かりのない運命に委ねることを選ぶのだ。」(PI pp.311-312)

いかに「自らの幼年期」が素晴らしいものであり、その回想に耽ることが無上の喜びをもたらすものであったとしても、超現実とは考えにくい。少なくともブルトンの論の進め方としてはそうである。ただし超現実ではないかもしれないが、ブルトンはシュルレアリスムのイメージに言及しながら、そのイメージを生み出す宝庫として自らの幼年期を捉えているのだ。つまり「シュルレアリスムに没入する精神は感情の高ぶりとともに自らの幼年期の最良の部分を再体験する。(中略) 幼年期の思い出といくつかの別の思い出から心を占めているわけではなくてその結果墮落した(下線原文)感情が引き出されるのであるが、私はそれを存在する最も実り多いものだと見なしている。<本当の人生>に最も近付くのは恐らく幼年期なのである。人間はそれを過ぎると、通行許可証に加えて、何枚かの優待券しか自由に使えない幼年期。全てがしながら自分自身の効果的で失敗の危険性のない所有に協力していた幼年期。シュルレアリスムのおかげで、これらの機会が戻ってくるように思われる。」(PI p.340)

要するに幼年期を再体験することによって、我々はシュルレアリスムが目標とするものに近付けるというわけである。もっとも既にブルトンが指摘しているように、幼年期に近付くために我々は想像力を駆使しなければならないのであって、我々は当初考えていたわけであるが、超現実とはむしろ我々の眼前に与えられるような形で出現するものとするイメージからはかけ離れたものである。というのも超現実の前提である夢にしても現実にしても、その内容や質を別にすれば既に与えられたものとしてあるからである。このように考えるならば、超現実とは何らかの外的世界であって、この現実中存在するものであるという予測が立つことになる。そしてその予測に合致するものが、ブルトンの言う「城」なのである。『シュルレアリスム宣言』においてブルトンは不可思議について触れながら、城の問題を持ち出している。「今日のところはその半分が必ずしも廢墟でなければならないわけではないある城(下線原文)のことを考えている。この城は私のもので、私はそれをパリから遠くない田園風景の中に見る。その付属建造物は最早尽きることがなく、そして屋内はどうかと言えば、設備に関して改善の余地は何もないように、それはものすごく修復されている。(中略)しかし私が案内するこの城のことだが、これが心像だというのは確かなのか。それでも、この宮殿が存在したなら!(中略) 我々がそこにいる時(下線原文)、暮らし方は本当に気の向くままなのだ。そこでは、感傷的な追求を免れて様々な機会が提供される中で、ある人のすることが別の人の迷惑になるということがどうし

てあり得るだろうか。」(PI pp.321-322)

この『シュルレアリスム宣言』が刊行された1924年の段階においてこの城はブルトンにとってただの空想にすぎなかったのかもしれないのであるが、1926年の出来事を綴った『ナジャ』においてこの城はまさに実在するものとして示されているのだ。『ナジャ』はその主たる部分が1926年の10月4日から12日までの日記形式になっているのであるが、10月13日にブルトンがナジャとサン・ジェルマンに出かけた時のことを思い出して書いている部分に次のような箇所がある。「そこ、城の上の方にある右側の塔の中には一部屋あって、多分人は私たちにそこを訪れさせようとは思わないだろうし、私たちは恐らく訪れてみずかったかもしれないのだが——それを試みる理由はほとんどないのだ——しかしナジャによれば、私たちが例えばサン・ジェルマンで知っておく必要があるということになるだろう全てなのだ。(中略)仕掛けの楽園の中のこの種の旅のように精神の最大の冒険を着想することは許されているのだ。」(PI p.716)

ブルトンにとってこのような城はまさに実在するものとして認識せざるを得ないのは、単なる空想の産物ではなく実例がこの他にも示されているからに他ならない。ブルトンはまず文学作品の中で城に対する偏愛を示すことから始める。ブルトンは『通底器』において次のように書いているのだ。「私の精神の最も陰鬱な片隅において、大きな亀裂が走り、地下道が侵食している、オトラント、ユドルフ、ピレネー、ロヴェル、アトランそしてダンベインのこれら全ての城は、あくまでも不自然な生活を送り、奇妙な燐光を見せ続けていた。」(PII p.174)

そしてこのような偏愛は郵便配達員シュヴァルの「理想の宮殿」へと向けられる。『通底器』のテキストにはブルトンがこの「理想の宮殿」を訪れた時の写真が挿入されているのだが(PII p.204)、それについての言及はテキスト中には見当たらない。ただしこれには事情があって、マルグリット・ボネによると(PII p.1342)、当時愛人であったヴァランティエヌ・ユゴーを伴って、ブルトンが初めてこの「理想の宮殿」を訪れたのが1931年の夏だったということである。『通底器』の初版は1932年11月26日であるが、前年の夏の初めに一年以上前から愛人であったヴァランティエヌ・ユゴーを連れてブルトンはブルゴーニュでヴァカンスを過ごしている。その後別々の行動をとったのだが、8月の終わりに再び行動を共にし、カステラーヌのルヴァンホテルに大体9月25日頃まで滞在したようである。そしてちょうどこの時期に、ブルトンは様々な文献を読んで『通底器』執筆のための仕事を始めることになるのだ。ブルトンが「理想の宮殿」を訪れるのはこの後で、9月の末、パリに戻る途中に寄り道をして、わざわざこのシュヴァルの「理想の宮殿」を訪問している。『通底器』に挿入された写真はその証しということになるが、執筆と並行していたためテキストそれ自体においては言及できなかったようだ。それでも「その印象は深く持続的」(PII p.1342)であったようで、『黎明』に収録されている1933年12月付けの「自動記述的託宣」においては「霊媒的建築と彫刻の押しも押されぬ巨匠であり続けている郵便配達員のシュヴァル」(PII p.383)に言及しているし、初版が1932年に刊行されている『白髪の拳銃』という詩集においてはまさに「郵便配達員シュヴァル」という詩まで書かれているのだ。また1935年に刊行された『シュルレアリスムの政治的位置』においては、「理想の宮殿」の簡潔ではあるが全体像を明らかにしている。「19世紀の終わり頃、フランスで、全く教養のない男がいて、彼の社会生活を営む職はドローム県のいくつかの村に郵

便物を配達することであったのだが、その郵便配達員であるシュヴァルは、いかなる援助もなしに、40年間変わることのない信念を持ってそして自分の夢から汲み出した唯一のひらめきの下で、いかなる使用目的をも未だ与えられ得ることなく、建築用資材を運ぶのに使用されていた手押し車のためだけにしか収容能力のある隅を用意していなかった不思議な建物を築き上げていたのだが、彼はそれを結局<理想の宮殿>という唯一の名前で明らかにしていたのだ。」(PII p.478)

ただし、このようにシュヴァルの「理想の宮殿」に限らず、城がブルトンの詩的想像力をかき立てたということは事実であるにしても、城=超現実と定義付けてしまうことはできないだろう。少なくともそのような記述はブルトンのテキストの中には見当たらないのである。それでは超現実として捉え得る外的世界は最早考えられないのだろうか。『シュルレアリスムの哲学』を書いたフェルディナン・アルキエは次のような指摘をしている。つまりアルキエは『シュルレアリスムの哲学』の冒頭にブルトンが『シュルレアリスム宣言』に添えた『溶ける魚』を引用し、『溶ける魚』は、今日でも尚、シュルレアリスムの作品の中で確かに最強ではないにしても、最も意義深いものであると私には思われる。」(PS p.11)とした上で、そのテキスト1に「楽園」の一語が発せられていることに注目しているのだ。またこの箇所の注にも、『地の光』という詩集の中に「全ての楽園が失われたわけではない。」(PS p.19)という題の詩があることに言及している。アルキエは次のように書いている。「再び見出された楽園は、『溶ける魚』においては、パリのそれであり、愛の部屋の中でも最も素晴らしく、最も光り輝く部屋へと絶えず変わっていく一つのパリのそれである。」(PS p.20)

つまり自らの外的世界に既に与えられたものとして超現実を求めていくならば、現実の中であったとしても現実そのものであってはならず、言わば変形された現実でなければならないはずである。だからこそアルキエは「再び見出された楽園は日常生活の、美化された日常生活のそれではなければならない。」(PS pp.19-20)と書くわけである。この点については『ナジャ』においてブルトンが同様の考えを示していることが見て取れる。『ナジャ』は単純に表現してしまうならば、ブルトンとナジャの愛と別れの物語ということになるのであるが、1926年の10月4日から12日までの日記形式で語られる物語の中心部分は、主人公がブルトンやナジャであるにも拘らず、パリの観光名所巡りではないにしても、パリのあちこちが舞台として登場するのだ。事実ブルトンはナジャと別れてしまった後、『ナジャ』を書き上げるにあたって、「私はこの物語が通じることもある場所のいくつかを再び訪れることから始めた。」(PI p.746)

確かにパリという街は現実中存在するし、ブルトンはその現実にあるパリから何らかのものを得たのだということは言えるだろうが、それは明らかに変形されたパリなのである。ブルトンは『ナジャ』の第三部において様々な回想を行なっているわけであるが、ここにおいてパリという限定はせずには外的世界について次のように書いているのだ。「<ある街の外形>について、私の思考にとって空気が生命のために存在していると思われているようなものである基本要素の力によって私が住んでいるそれから取り出され抽出された真の街についてさえどうなっているのかを思い巡らせることになるのは私ではない。何の未練もなく、今私はそれが別のものになり遠ざかっていくのさえ見ている。」(PI p.749)

『溶ける魚』や『ナジャ』におけるようにブルトンにとってパリは一種の「楽園」であって、詩的想像力をかき立てる外的世界であることは間違いない。しかしそれにも拘らず、パリはあくまで現実であって超現実ではない。超現実と言うにはあまりにも現実的すぎるのだ。もっともこのように外的世界は現実中存在し続けることによって否定されるのであるが、詩的源泉としては相変わらず有効に機能し続けることは確かである。マルグリット・ボネは『ナジャ』の結末部分においてまさに唐突とも思えるような形でブルトンが美について言及することについて、「生活との関係で何よりも距離によって特徴付けられる」(PI p.1562)点を指摘している。つまりどれだけ現実から隔たっているかという点に注目しているのである。ここからボードレー尔的な「旅への誘い」が出てくるわけで、この点についてはアルキエも『シュルレアリスムの哲学』において次のように指摘している。「別の詩において、<君の香水に似せて作った国の崇拜者>である少女は、<君に似た国に>暮らしに行こうというボードレー尔的な欲望を我々に思い出させる。」(PS p.46)

つまり外国はそこに既に住んで日常生活を営んでいる人々にとってはまさに現実なのであるが、そこを外国として捉える人々にとってはまさに異国情緒をもたらす場所であるわけだ。これは既に触れた城においても同様であって、そこでは親しい友人たちと自由に過ごすこともできるが孤独にも適した場所であって、まさに「開かれていると同時に閉ざされた場」(PI p.1338)なのである。これは「理想郷」(PI p.1338)に他ならないわけであるが、あくまで「精神的共同体のイメージ」(PI p.1338)であることに注意しなければならない。このように考えるならば超現実とは何らかのイメージにすぎないように思われるのであるが、それでも何か求めるべき対象、あるいはもっと正確に言うなら到達すべき場所であるかのように我々には思われるのは、例えばブルトンが『シュルレアリスム宣言』において次のような表現を使っているからである。例えば既に言及したように超現実の定義らしきものを書いた上で、「私が向かうのはその獲得である。」(PI p.319)と書いているわけで、当然そこには超現実が何らかの目標物として存在するという見通しが立つのである。ところがそれは物として機能するのではなく、何らかの場所を指し示しているのではないかと推察されるのは、次のような箇所があるためである。つまり「詩的想像の源泉」(PI p.323)に言及した上で、次のように書いているのである。「全てはまず不十分に事が運ぶように思われるこれらの人里離れた地域に住みつきたいと思うためには、ましてやそこに誰かを連れて行きたいと思うためには、かなり自分を抑えなければならない。その上そこにまったくもって存在しているという確信は決してないのだ。どうせ居心地が悪いということなら、別の所で留まる気にもなるわけだ。それはそうなのだがやはり今のところは一つの矢印がこれらの国の方向を指し示していて真の目的の達成は最早旅人の忍耐力に依存するしかないのである。」(PI p.323)

ここにおいてブルトンは超現実という言葉を使っていないので、あくまで類推ということになるのであるが、超現実とは今現在は存在していなくてもいずれは存在することになる場所であり、そこに到達することがシュルレアリスムの目的であると読むことが可能であろう。それでは超現実とは一体どこにあるのかが問題となるのである。

第一部 ヘーゲル哲学とシュルレアリスムのイメージ

第一章 ヘーゲル弁証法と二項対立

超現実の定義らしきものは既に指摘したように 1924 年に刊行された『シュルレアリスム宣言』の中で言及されているのだが、定義として考えるならむしろ超現実よりも『通底器』のようにブルトンの他の著作の題名にもなっている通底器について言及したものが 1928 年に初版が出た『シュルレアリスムと絵画』の中に見られる。「私が愛する全てのもの、私が考えそして感じる全てのことは、超現実が現実そのものの中にも含まれ、それに対して上位でもなければ外部でもないであろうとする内在性の特殊な哲学へと私の気持ちを傾けさせる。そして先程のことは逆もまた正しいのであって、というも入れ物はまた中身でもあるだろうからである。入れ物と中身の間の通底器が問題であると言っていいだろう。」(PIV p.404)

これは超現実の定義というよりも、超現実と現実の表面上は矛盾する関係を結び付けるものとして、通底器という化学の実験などに使われる底のつながった容器を例にして説明したものである。この箇所はむしろ非ヘーゲル的であるが、注目すべきは矛盾する二項をいかにして矛盾しないものとして捉えるかという考えが示されている点にある。ブルトンにしてみれば『シュルレアリスム宣言』において言及した超現実を一旦離れ、二項対立をいかにして解消するかという点にシュルレアリスムの目的が移っていったかのような感じさえるのである。1930 年に刊行された『シュルレアリスム第二宣言』のほぼ冒頭の部分において、ブルトンは次のように書いている。「あらゆる点から見て、生と死、現実界と想像界、過去と未来、伝達可能なものと伝達不可能なもの、上部と下部とが矛盾して感じ取られるのをやめる精神のある一点が存在すると考えざるを得ない。ところで、この一点の確定の希望とは別の動機をシュルレアリスム活動に探し求めるのは無駄だろう。」(PI p.781)

ここには超現実について直接の言及は見当たらない。もっともこれよりも少し後の箇所において同様に矛盾の解消について触れた件があって、そこには次のように書かれている。「美と醜、真と偽、善と悪といった不十分で不合理な区別を無視しようという欲望が生まれ維持されるのは意味のないこれらの表現がまさに嫌悪の念を起こさせるように湧き出るからである。そして、結局住むのに適した世界への精神の多かれ少なかれ確かな飛び立ちが依存するのはこの選択の概念が出遭う抵抗の度合いなのである(後略)」(PI p.782)

ここで示されている「結局住むのに適した世界」が超現実ということなのであろうか。その正否はともかくとして、ブルトンにとっての関心は明らかに超現実よりも二項対立をいかにして解消するかという点にあるように思われる。そしてこの二項対立の解消のために拠り所としたのがヘーゲルの哲学なのである。この点については明らかであって、いくつかのテキストにその根拠を見出すことができる。まず相対立する二項が矛盾なく捉えられる精神の一点を求めるところこそシュルレアリスムの目的であると明言している『シュルレアリスム第二宣言』において、ブルトンは次のように書いているのだ。「シュルレアリスムは、現実と非現実、理性と狂気、内省と衝動、知と<必然的>無知、有益と無益などといった観念の訴訟を企てる道にわざわざ入っていくとしても、ヘーゲル体系的の<大規模な挫折>から始まっているというこの傾向の類似を史的唯物論とともに呈している。否定に、そして否定の否定に決定的に順応した思考

の行使に、限界を、例えば経済的な枠というそれを割り当てることは私には不可能に思われる。弁証法的方法は社会的問題の解決にしか有効に適用され得ないとどうして認められるのか。シュルレアリスムの全ての野心は最も直接的な意識の領域において少しも競合しない適用の可能性を提供することである。」(PI p.793)

またこれよりも先行する形で、1922年4月1日『文学』新シリーズ第2号に発表され後に1924年に刊行された『失われた足跡』に収録されている「全てを棄てよ」の中には、ヘーゲルの思想についての言及がある。「全てのものがその反対に沈殿し、二項とも唯一の範疇、初めの項とそれ自体両立し得るそれに溶解して、精神が全ての対立の和解と全ての範疇の統一という絶対的観念へと到達するまで以下同様という思想が、今日では、作られている。」(PI p.262)

つまり「精神の一点」の存在をシュルレアリスムの活動の目的とする『シュルレアリスム第二宣言』が書かれた1930年よりもずっと前にこのヘーゲルの哲学については関心を示していたわけである。そしてブルトンの語るところによれば、ブルトンのヘーゲル傾倒は更に遡ることになるのである。つまり『対談集』において『シュルレアリスム第二宣言』で明らかにされた「精神の一点」について説明を求められたブルトンは、次のように説明しているのである。

「全ての二律背反のこのような超越の観念が<ヘーゲル的>なものを持ち得ることについて強調することは無駄ではないのです。この一点をわかるために、私の力の全てをもってそれを目指すためにそしてまさにこの緊張でもって、私の人生の目標とするために、必要な状態に私を持って行ったのは——異論の余地なくヘーゲル——他の誰でもないのです。ヘーゲルの著作全体について私よりかなりよく知っている人たちは恐らくいるでしょう。どんな専門家でも注釈についてはその点に関して私より優れていることを示すでしょうが、私がヘーゲルを知って以来、更に1912年頃、私の哲学の先生だった実証主義者のアンドレ・クレソンがヘーゲルにいつも繰り返していた痛烈な皮肉を通して感じ取って以来、私は彼の考え方を吸収したということ、そして私にとって彼の方法は他の全てのものを貧弱なものにしてしまったというのはそれでも尚本当なのです。ヘーゲル弁証法が機能しないところでは、私にとって思想もなければ真実への希望もないのです。」(PIII p.525)

更に1937年の1月に発表され、後に『野をひらく鍵』に収録された「シュルレアリスムの非国境的境界」においては、シュルレアリスムの提唱として次のように書かれているのだ。「シュルレアリストたちがその全ての命題を自分たちのもの(下線原文)と見なす弁証法的唯物論への賛同。思索に対する物質の優位、外的世界並びに人間の思考の動きの一般的法則についての学問としてのヘーゲル的弁証法の採用」(PIII p.662)

このように見てくるならば、ブルトンにとってシュルレアリスムを実践していく上での理論的根拠はヘーゲルの哲学であり、それはまたシュルレアリスムの理論的根拠としても捉え得ることを意味する。それは確かにそう言えるのであるが、それならば夢と現実がどのようにして超現実へと矛盾なく成立していくのかという具体的事例については、示されないままなのである。つまり我々がここで立ち止まらざるを得ないのは、ヘーゲルの弁証法が示された後のことなのである。確かにヘーゲルの弁証法が応用されたのだと思われるものがある。しかしそれ以外の領域について見てみるならば、むしろヘーゲルの哲学とは相容れない思想の存在を見て取

ることも可能なのである。それではとりあえずヘーゲルの哲学を抛り所にして超現実を見出そうとする我々にとって、それがいかなるものであるかを見ておく必要があるだろう。

第二章 シュルレアリスムにおけるヘーゲル哲学以外の可能性について

『シュルレアリスム宣言』における超現実の定義らしきもの、そして『シュルレアリスム第二宣言』における「精神の一点」についての記述から、特に我々が超現実が何であるかを探究しようとしているわけであるから、ヘーゲル哲学との親和性というものとは否定できない。それによってシュルレアリスムの全てを理解しようとしても問題ないのではないかとさえ思われる程である。ところが『シュルレアリスムの哲学』において、アルキエはブルトンの考えにある「非ヘーゲル的性格」(PS p.47)を指摘するのである。例えばブルトンは『シュルレアリスム宣言』において幼年期の重要性について力説しながらも、自らその幼年期に戻ることを試みることはない。この点についてアルキエは次のように説明するのだ。「彼は失われた時のブルースト的な、しかしながらまた幼年期への愛と魅惑の感覚によって支配された探究を拒絶さえしたのである。しかしその時ブルトンをブルーストから隔て、永遠なるものの形而上学に属することを妨げるものは、確かにヘーゲル的な論理ではない。それはむしろ、普遍性についてのカント的配慮であり、彼の決意によれば、万人の世界にならなければならないこの不可思議の世界を何人かの恵まれた人たち専用とすることの拒絶である。」(PS p.47)

別の例を見てみるならば、既に指摘した通底器の存在が超現実と現実の関係を説明するものでありながら、およそ超越的なものではない点に顕著に現われている。そして更に特筆すべき重要な点は、ヘーゲル弁証法によって解消されると考えられている二項対立のそれぞれの項目についてのことなのである。『シュルレアリスム宣言』で夢と現実が融合して超現実となるという過程において、少なくとも定義らしきものの表現においては夢と現実のどちらが優位にあるかということとはわからない。『シュルレアリスム宣言』の最後においてブルトンは「私が考えているようなシュルレアリスム」(PI p.346)は「現実的世界の訴訟」(PI p.346)をするのであるから、現実を否定しているかに思われる。ところが同じく『シュルレアリスム宣言』において夢の問題に触れている箇所、ブルトンは「夢の深み(下線原文)を考慮に入れなければならない。」(PI p.317)とした上で、「<現実>の中に、同様に、私は落下する(下線原文)方がいい。」(PI p.317)と書いている。またこれは夢との対比ではなく幻想と現実ということになるが、不可思議について触れている箇所、「幻想の中にある素晴らしいこと、それは最早幻想的なものがないことである。つまり最早現実の世界しかないのだ。」(PI p.320)と書いている。要するにアルキエが『シュルレアリスムの哲学』において指摘しているように、「しかしながらブルトンが幸福を見出す、そして愛によってそれを見出したいと思うのは、この世界からであり、そのみにおいてである。」(PS p.19)

このように考えるならば、ブルトンにとって現実の優位は揺るぎないように思われる。しかしこのことはこの段階では問題ではない。『シュルレアリスム第二宣言』の冒頭近くの部分で、「精神の一点」について触れていて、ここで提示されている二項対立とは「生と死、現実界と想像界、過去と未来、伝達可能なものと伝達不可能なもの、上部と下部」(PI p.781)なのであ

るが、ここにおいてそれぞれどちらが優位にあるかを決定することは主観的な問題もあり一律に決めることは難しいだろう。ところがここよりも少し後の箇所において、ブルトンが「しかしながら、これらの会計検査に取り掛かる前に、シュルレアリスムがまさにいかなる種類の精神的美徳に訴えるか知ることが重要である。」(PI p.782)とした上で、「美と醜、真と偽、善と悪といった不十分で不合理な区別を無視しようという欲望が生まれ維持される」(PI p.782)と書くに至って、ここにおいて単なる二項対立ではなく価値の問題が前面に出てくることになる。もちろんブルトンはここでどちらの方に価値があるかと主張したいわけでもなく、また世間の価値判断を覆したいと思っているわけでもない。そもそもこのような価値を生み出している差異を解消したいということなのである。ジル・ドゥルーズは『ニーチェと哲学』において、次のように書いている。「最も重要な点はこうである。つまり身分が高いと低い、高貴なものと卑しいもの(下線原文)は価値ではなくて、それぞれの価値自体の価値が由来する差のある活動領域を表わしているのである。」(NP p.2)

つまりニーチェは価値が生まれる根源に、「差異もしくは落差(差のある活動領域)」(NP p.2)を持って来るのである。そして「様々な価値を生み出したりそれらを確定したりする権利を不当に手に入れるのはこの落差の意識の上からである。」(NP p.2)

自らの価値を肯定するためには、相手の価値を否定しなければならない。初めに否定ありきなのである。夢と現実を融合させて超現実¹に到達するというブルトンのシュルレアリスム的企てにおいて夢を否定することも現実を否定することも不必要なのであり、むしろ必要であるのはそのお互いの差異をいかにして解消していくかということに他ならないのである。この意味でシュルレアリスムの根底にあるものは、ヘーゲル的というよりはニーチェ的であると言えるだろう。ここには我々が想像する以上の隔たりがあるのであって、ドゥルーズは次のように書いている。「ヘーゲルとニーチェの間に考えられる妥協は存在しない。ニーチェの哲学は論駁的な大きな影響力を持っている。それは絶対的な反弁証法を形成し、弁証法の中に最後の逃げ場を見出す全ての欺瞞を告発することを目的としている。」(NP p.223)

そしてその告発の内容とは、例えば次のようなものである。「弁証法が対立と矛盾の中に思弁的な活動領域を見出すのは、まずそれが差異の根拠のない様相を反映しているからである。(中略)ヘーゲル的弁証法は確かに差異についての思索であるが、それを逆転させているのである。差異そのものとしての肯定を、異なったものの否定に置き換える。自己の肯定を、他者の否定に。肯定の肯定を、有名な否定の否定に。」(NP p.224)

このような論理展開をして何の意味があるかということであるが、ドゥルーズは続けてこのように書いているのである。「しかしこの逆転は、もしそうすることが得策である諸勢力によって実際に推進されなかったとしたら、意味を持たないだろう。」(NP p.224)

シュルレアリスムをドゥルーズの言うヘーゲル弁証法で捉えるなら、例えば『シュルレアリスム第二宣言』の次のような箇所は理解できるに違いない。つまり既に指摘した二項対立の解消を目指した件である。「シュルレアリスムが絶対的反抗の、完全な不服従の、正規の手抜き²の信条を臆することなく手に入れること、そして依然として暴力にしか何も期待しないことを人は理解するのだ。」(PI p.782)

いささか物騒ぎな表現であるため、一旦論点から外れるが、ブルトンの但し書きを参照しておくなら、「そうなのだ、この人において、暴力が折り合いをつける(下線原文)のか折り合いをつけない(下線原文)のか、自問する前にその人に暴力が生まれながらに備わっているのかどうか私は知りたくて仕方がないのだ。」(PI p.783)と書いているので、暴力を鼓舞するものではないことは明らかで、むしろそこに至るまでの方法が、つまり暴力を回避する方法が重要であることは理解されるであろう。いずれにせよ、このように現実の恐らくは政治的という表現を使うことが可能な領域においては、ヘーゲルの弁証法が力と結びついている点を理解することができるわけであるし、この意味においてヘーゲルの弁証法は有効であると判断することも可能である。シュルレアリスムが現実世界の告発をすることを目指している以上、ヘーゲルの弁証法を根拠としているというブルトンの意見表明も我々にとっては納得のいくものである。しかしこのヘーゲルの弁証法の行き着くところに超現実とは垣間見えるであろうか。超現実を探し求める我々は、全く別のところに来てしまったように思われる。

第三章 二項対立の解消とシュルレアリスムのイメージ

ブルトンが『シュルレアリスム宣言』において表明したシュルレアリスムの企ては、その後どのような展開を見せたのであろうか。話を超現実限定するにしても、『シュルレアリスム宣言』において超現実の獲得を目指して以降、超現実という言葉すらテキストにおいて見出すことも難しくなる。確かに事はそれ程容易でもなかったということだろう。もっともシュルレアリスム精神は依然として生き続けているのであって、我々はここにおいてそれを見ることになるだろう。まず『シュルレアリスム宣言』の言わば後半部分において、ブルトンは「言語は人間がシュルレアリスム的な使用をするために与えられたのだ。」(PI p.334)と明らかにする。そしてその上で「シュルレアリスム的な言語の諸形態が最もよく適応するのは依然として対話である。」(PI p.335)ここでは二人が対話を重ねていくのであるが、通常の日常生活においてはたとえ表面的なものであれ相手の話に合わせていることをしており、それが礼儀として捉えられているわけであるが、そのようなあり方から解放させることによって対話を成立させていくのである。そしてここからシュルレアリスムの詩という領域に移っていく。ブルトンは、『シュルレアリスム宣言』において次のように書いているのだ。「私がこの研究を捧げている詩に関するシュルレアリスムは、儀礼的義務から二人の対話者を解放することで、対話を絶対的真理の中に取り戻すことにこれまでのところ専念してきた。」(PI p.336)

そして更にここから、もしくはここにおいてシュルレアリスムのイメージという概念が生まれてくる。このシュルレアリスムのイメージは人為的に作り出すことができるものではなく、ボードレールの表現を借りるならば「自発的に、専制的に彼に現われる。」(PI p.337)

もっとも偶然に期待するしかないというわけでもなく、それなりに「喚起」(PI p.337)できるかどうかという問題は打ち立てることが可能なのである。つまりブルトンは『ノール・シュド』誌(1918年3月)に掲載されたピエール・ルヴェルディのイメージ論を、その抜粋として「イメージは精神の純粋な創作物である。/それは比較からではなく多かれ少なかれ離れた二つの現実の接近から起こり得るのだ。/接近した二つの現実の関係が遠くて適切であればある程、イメ

ージは出来がよいだろうし——感受性の強さと詩的現実性を持つだろう…等々。」(PI p.324)を引用した上で、次のようにシュルレアリスムのイメージ論を展開する。「私に言わせれば、対峙した二つの現実の<関係を精神が把握した>と主張することは間違いである。それは、最初は、意識的に何も把握してなかったのだ。我々が限りなく心を動かされることがわかる特殊な光、イメージの光(下線原文)が急に姿を現わしたのは、二つの言葉の言わば偶発的な接近からである。イメージの価値は手に入れた輝きの美しさ次第である。それは、従って、二つの電導体の間の電位差によって決定されるのである。この電位差が直喩におけるようにほとんど存在しない時、輝きは生じないのだ。」(PI pp.337-338)

シュルレアリスムのイメージとはシュルレアリスムにとって極めて重要な領域であり、これのみであったとしてもシュルレアリスムを高く評価し得るものであるとさえ断言できるのであるが、当初のブルトンが主張するところのシュルレアリスムの企てから捉え直してみた場合、言語のみに限られた一分野といった観も否めないのである。この論考においては、ブルトン自身のシュルレアリスム運動における活動史といったようなものを問題にしているわけではないし、たとえそのようなものを問題にし得るとしても、そのようなものを度外視した上でテキストのみから解読していくことが本来の目的なのである。ただ実際問題としてブルトンは他のシュルレアリストたちとの協力や断絶といったものを経験しているし、実生活における女性たちとの関わりもテキストに大きく反映されているという事情もあるので、全く無視して考えることはできない。このシュルレアリスムのイメージの問題についても『通底器』において詳細に書かれている部分があるのだが、その場合にも実生活での問題が深く関わっているようである。ブルトンは『通底器』において次のように書いているのである。「私は話をするために、私のことと言うと、際立って不合理な時期と見なし得る私の人生の当時のことを選んだのはわざとである。既に見たように、ある人の耐え難い喪失によって全ての実際的な活動から身を引き、私がある時までそうであったし再びそうなったのであるが主体でもあり客体でもある私が、最早自分を主体としてしか思えなくなっていた時期が問題だったのである。」(PII p.180)

そしてこの箇所のすぐ後に注の形でシュルレアリスムのイメージ論が展開されるのである。「お互いに可能な限り離れた二つの対象を比較すること、あるいは、全く別のやり方によって、唐突ではっとさせる方法でそれらに対峙させることは、詩が切望し得る最高の使命として残っている。引き合わせられたこの言葉の具体的統一性を明らかにさせること、そしてそれが何であれ、個別に捉えられていた限りでは欠けていた力強さをそれぞれに伝達することである比類のない独自の力はそれにおいて徐々に発揮されることを目指さなければならない。」(PII p.181)

ここにはブルトンが依拠しているヘーゲルの弁証法がシュルレアリスム詩論として展開されているのが見て取れる。ここにあるのはまさにヘーゲルの弁証法なのである。従ってもしブルトンの意図するところがヘーゲル弁証法のシュルレアリスムの詩への応用だとするならば、それは十分に理解できるし、成功したと見なすことも可能である。ただし問題は超現実がどこに存在するかだ。仮に夢と現実が融合して超現実となるといったシュルレアリスムの現象として捉え、詩的に表現するということは可能だろう。例えば「夢の中の現実」とか「現実から目覚めたら夢の中にいた」とかいった表現は、いささか陳腐であったとしてもシュルレアリスムの

はあるし、そこに超現実的なものを感じ取ることも困難ではないだろう。逆に言うならば、それが可能なのは詩の世界だからである。要するに言葉は現実にあるもの、つまり指示物の代わりをするのであるから、詩の世界において直接超現実という言葉を用いずとも、超現実の代わりをするものは確かに存在すると言えるだろう。それを指して我々はシュルレアリスム的と表現するわけである。確かにそれは超現実の代わりをするものであるため超現実そのものではないわけであるが、それを通過することによって超現実¹に到達する一つの過程となり得ると思われる。つまり大よそでも超現実の何たるものかを知らなければ、それと認識することは不可能だからである。このシュルレアリスム的イメージについてブルトンは『シュルレアリスム宣言』において「私がシュルレアリスム的と呼ぶ活動と同時に起こる産物」(PI p.338)と表現していて、あたかも目的ではなく副産物であるかのように捉えているわけであるが、これも詩の中に超現実そのものは存在しな²くなれば首肯し得るところである。それではブルトンはこのようなシュルレアリスムの詩によって何をを目指していたのかということになる。この点についてはブルトンがシュルレアリスム的イメージに言及したすぐ後のところで、次のように書いていることから理解されるだろう。「そして輝きの長さが希薄にされた気体を介して生じるまで続くのと同じように、私がみんなの手の届くところにどうしても置きたいと思った無意識的記述によって作られたシュルレアリスム的雰囲気は、とりわけ最も美しいイメージの生産に適している。イメージは、この気が遠くなるような動きの中では、精神の唯一の道標として現われると言うことさえできる。精神はこれらのイメージの最高度の現実性を少しずつ確信する。まずはそれらを享受することだけに留めながらも、精神はイメージが理性を強化し、その分だけ知識を増やすことにやがて気付くのだ。精神は欲望が明らかになり、可否が絶えず変化し、難解さが精神を裏切らない無限の広がり³を自覚する。精神をうっとりさせ、息を吹いて指の火をかき立てる暇もほとんど与えないこれらのイメージによって支えられ、精神は機能するのである。」(PI p.338)

つまりシュルレアリスムの詩が向かうのは、我々の精神なのである。当初はシュルレアリスム的な雰囲気⁴に留まりそれを感じるだけであるが、次第に精神の中へと浸透していくのである。ブルトンにしてみれば「シュルレアリスムの行動への応用」(PI p.344)が「はるかに重大に」(PI p.344)思われるのは、シュルレアリスムの詩がシュルレアリスムの活動の中にあってはやはり一分野にすぎないと考えられるためであろう。そしてその意図するところは、詩の場合と同様と考えて問題はない。さてそれでは超現実⁵はここに至って一体どこに存在するのであるか。シュルレアリスムの詩の中に超現実そのものではないにしても、超現実の代わりになるものがあるとして考えた場合、例えば『ナジャ』において言葉遊びをするナジャはどのように捉えればよいのであろうか。1926年の10月4日にブルトンはナジャと初めて出会うのであるが、その翌日である10月5日、急に打ち解けた態度になったナジャは一人で言葉遊びをしていることを打ち明け、「私が生きているのはまさに完全にこういう風なの。」(PI p.690)と言うのであるが、それに対してブルトンはテキストの注の形で次のように書くのである。「人はそこでシュルレアリスムの熱望の頂点、最強の限界理念(下線原文)に触れるのではないか。」(PI p.690)

この場合ナジャをシュルレアリスム的⁶の精神の具現化と表現することは可能であるとしても、

超現実をそこに見て取ることはできないだろう。ブルトンが『シュルレアリスム第二宣言』において「シュルレアリスムが行使されることから始めた詩の領域におけるシュルレアリスムの考えられる獲得物」(PI p.792)を問題にし、それが社会的領域に移行するかに見える状況において超現実とは社会的変革の後にこの現実において達成されるべきものであるのかという疑問を抱くのであるが、この『シュルレアリスム第二宣言』のほぼ終結部分においてブルトンが「私はシュルレアリスムの深く、正真正銘の隠蔽を望む。」(PI p.821)と書き、「世間への譲歩もないし神の恩寵もない。」(PI p.822)と付け加える時、その方向ではないということが確認されるわけである。ここに至って我々はブルトンの定義らしきものを手掛かりに超現実を探し求め、シュルレアリスムの詩の中に超現実らしきものの存在の可能性を認めるわけであるが、未だ超現実とは何であるかについて充分理解できたとは言えない。我々は再びブルトンの定義らしきものに戻って超現実を探し求める手立てを考える必要があるのだが、ブルトン自身同様の思考過程を辿っているようにも思われ、ブルトンのテキストを少し違った観点から読み直し、超現実とは何かを明らかにしていきたい。

第二部 夢から超現実へ、そして愛

第四章 夢から<第二状態>へ

夢と現実が融合することによって超現実となるというブルトンの考えはヘーゲルの弁証法によって支えられているということから、我々はヘーゲルの弁証法を頼りに超現実を探し求めてきたわけであるが、それは結局のところシュルレアリスムの詩を生み出す過程を理解したに留まった。そこで我々は夢を出発点として超現実に辿り着くことを考えた。そしてこれはブルトンも同様に考えていたことが明らかであって、ブルトンは『シュルレアリスム宣言』において夢を考察の対象としているのである。ブルトンは『シュルレアリスム宣言』において冒頭から現実の生活、想像力、狂気の問題、そして小説の文体と話を展開させながら、徐々に本題へと持っていく。「我々は依然として論理の支配下に生きていて、以上が、当然のことながら、結局私が論じたかったことなのだ。」(PI p.316)

そしてシュルレアリスムの立場から論理では捉えることの出来ない世界を目指すわけで、ここで検討の対象となるのが夢なのである。当然この夢の研究については先行者がいるので、「フロイトが夢について批判的検討を生じさせたことは非常に正当である。」(PI p.317)

ところが問題なのは、夢について検討を加える場合目覚めてから夢の内容を思い出しそれについてしか考察することが出来ないということである。ブルトンも指摘しているように、我々にとって夢として覚えているものは恐らく目覚めてからその夢の内容を一つの物語であるかのように加工しているのではないかという懸念である。従って夢を対象として検討を加えると言いつつも、そこにあるものは現実の立場から既に変更を加えられているものなのである。だからこそブルトンは次のように書くのだ。「私は原則として、夢と相容れない方式に従って夢について話すのは残念に思う。眠れる論理学者や哲学者はいつのことか! しっかりと目を開けて、私の本を読む人たちに私が心を打ち明けているように、眠っている人に心を打ち明けることができるために、私は眠りたいのだけれど。」(PI p.317)

確かに夢の中にいる自分が現実においてあれやこれや考察するように夢そのものを考察することはできないのであり、従って不満は残るものの目覚めた段階で覚えている限り夢について考察していくことを目指すことしかないのである。それが次のような表明へと繋がるわけであるが、問題はこの表明が超現実を信じることに繋がるということなのである。まずこの表明を見ておこう。ブルトンは次のように書いているのだ。「夢がいずれは体系的な検討に委ねられ、明確にする手段によって、夢をもとのままの状態で我々に説明することができるようになり(そしてそれは何世代にも及ぶ記憶の規則を前提としている。やはり際立った事実を記録することから始めよう)、その曲線が比類のない規則正しさと広がり発展していく瞬間から、今は存在しない神秘が大いなる<神秘>に取って代わられることを期待できるのである。」(PI p.319)

そしてこの後に、夢と現実が超現実へと融合するといった件が続くのである。従って超現実に辿り着くためには、まず夢の研究から始めなければならなかったわけだ。ところが『シュルレアリスム宣言』においては、夢への言及はここで終わってしまう。この後は不思議とかシュルレアリスムのイメージとか自動記述へと主題が移っていく。それでは夢についての研究はどうなったのかということになるのであるが、それについて我々は 1932 年に刊行された『通底器』へと向かうことになるのである。ブルトン自身の発言にもあるように、『ナジャ』『通底器』『狂気的愛』はブルトンにとって愛すべき重要な三部作であって、それはブルトンにとって理想の女性を追い求めた軌跡としても捉え得るのであるが、それは『通底器』に関して言えば夢の分析ということでブルトン自身が見た夢の記録とともに自ら分析を行なっていて、その際ブルトンにとっての私的生活が明らかとなるからである。これはフロイトが夢の分析を行なう際に自らの私的生活を明らかにすることを避けていたことを批判していて、自らはその信念を貫いた結果としても捉えることができるだろう。このようにブルトンが自らの私的生活を明らかにしたのは夢の分析のためということであって、『通底器』とは夢の分析に捧げた理論の書という位置付けにはなっているのである。この『通底器』のまさに冒頭において、ブルトンはエルヴェ・サン・ドニ侯爵の書いた『夢とそれを管理する方法——実用的観察記録』(PII p.103)という本を紹介している。このエルヴェという人物の考えたことは、眠るまでの間に、ある物と彼自身にとって好ましいイメージとを結び付けておいて、眠ってからその物の手助けによってそのイメージを夢の中で再現するというものである。現実生活において報われないものを夢の世界において補うということで、ブルトンの表現を借りれば「彼が語っている全てのことを通して見るとその人生は我々には結構空しく思えるのだが」(PII p.103)、興味深く充分参考にし得る実験であるように思われる。それにブルトン自身も言及していることだが、ユイスマンスの『さかしま』の主人公であるデ・ゼッサントが、現実の世界を忌避して自宅に閉じ籠り、本の世界から喜びを得ていたことからすれば、つまり神経質で病的なデ・ゼッサントと比べるとはるかに健康的であると言えるだろう。そしてここにおいてはるかに重要であると思われるのは、現実の世界と夢の世界の対立がまず前提としてあって、このエルヴェの試みにおいてブルトンが「錯乱性の哲学のために、現実の世界を夢のそれに対立させる傾向がある二項のぎりぎりの和解の可能性を見る」(PII p.104)ということなのである。これは想像の世界というのはあくまで現実の世界ではないという弱みがあって、本来なら現実の世界において体験すべきこ

とが何らかの理由により想像の世界で代用されているということがあるとすれば、それに対する反省でもあり反発ともなるのである。詩の世界を例にすれば、「そこには少し開いた扉があり、詩人たちのぐらぐらする家から出る時、人生においてわけなく自分の居場所がわかるためには最早一步踏み出すだけでいい」(PII p.104)というわけである。その意味で「ある男が夢の中で自らの欲望を実際に実現しようと試みるために自分の適性を知ったということは注目すべきことである。」(PII pp.104-105)と、ブルトンは評価するのである。ところがこの夢についての研究が果たして充分になされてきたかということに関してブルトンは「これ以上不快なことはない」(PII p.106)という驚きを示すのであるが、その克服のためにも我々自身によって確かめていかなければならないと主張するのである。つまり「夢の研究のためについ最近我々の自由に使えるようになった認識方法の価値を試すということで我々に提供されている唯一の可能性とは、我々の手に委ねられている理論の客観的実実がその実践の選抜競技において確認を得ることができるかどうか我々自身によって検討することにある。」(PII p.116)

そしてこの立場からブルトンは1931年8月26日の夢と1931年4月5日の夢を明らかにし、その分析も行ない、それとともに現実の生活についても夢の理解の助けになるという意味から明らかにするのである。この夢の分析が夢の研究においてどれだけの成果があったのかということよりも、我々はそこに示されているブルトンの女性関係を中心にした私的生活の方に関心を向けてしまう。実際『通底器』の第一部においてこの夢の分析が行なわれていたのであるが、第二部においては夢の分析ではないものの、あたかも第一部において夢の分析とともに明らかにされている女性関係の続きが語られているのである。我々はブルトンのこの女性関係の問題に関心を向けてしまうために、論理の展開を見失いがちであるが、ブルトンの言う夢の研究は明らかに進展したのであろうか。この点についてはブルトンの次のような思いが事情を明らかにしていると思われる。つまり「私としては、私の人生と私の個人的な熱望について、このような計画が脇に置いていた全てのものを見てたじろいでいたのだ。(中略) 覚醒と睡眠、外的と内的現実、理性と狂気、認識の平静さと恋愛、人生のための人生と革命などといったあまりにも解離された世界の間に主導原理(下線原文)を投げかける以上のことを何もシュルレアリスムは試みなかったと見なされていることを私は願っている。」(PII pp.163-164)

ブルトンにおいて評価すべきであるのは、フロイトが夢の分析に関して自らの私生活を明らかにしなかったことに対しての批判を実行したことで、このことが夢の研究に何らかの成果を上げることに繋がると期待できる点にあるが、エルヴェのいささか馬鹿げた実験に比べれば実効性に欠けるように思われる。このことから我々が夢を通して超現実には到達しようとする試みは、またしても行き止まりに出遭ったかのような観がある。実際ブルトンは既に指摘したように、『通底器』の第二部において夢の分析とは関係なく女性関係のいくつかについて語り始めるのである。ブルトンのこの行き詰まりを打開するのは恐らくシュルレアリスムの詩しかなかったのではないかとと思われるが、シュルレアリスムの詩が成立する二項対立の解消に論を進めることになるのだ。ここで再び出発点に戻って考えてみるならば、ブルトンが夢に注目したのは、『シュルレアリスム宣言』においても明らかにされているように、シュルレアリスム的な詩の源泉となり得るからである。一例として挙げてみるなら、「ところである晩、寝付く前、それ

をある言葉と取り替えることは不可能であった程ははっきりと発音されているが、しかしながら全ての声から音が取り出されていて、出来事の痕跡を見せることなく私のところにやって来ていた結構奇妙な文を私は感じ取ったのだ。」(PI p.324)

そしてただ単に夢を見ることだけに期待するのではなくて、言わば人工的に夢の状態を作り出すことができないかという試みである。我々の考えとしてはその人工的な夢の状態こそ超現実と考えられていたのではないかと推察するのであるが、例えばブルトンは『対談集』において、交霊術の領域において質問を受け、原理自体は馬鹿げたものとして否定しながらも、現象には興味を示したことを述べている。そして更に次のようにも語っているのだ。「当初は私たちがシュルレアリスムの好みの領域であったこれらの<第二状態>(まともではない状態)に取り掛かろうと努めたのがどんな精神的傾向においてであったか結構理解されていると私は思っています。」(PIII p.478)

つまり自動記述を実行するにあたって前提となる精神状態がこの<第二状態>であって、この<第二状態>が超現実との関係でかなりの結び付きがあると予想されるわけであるから、我々としては次の段階として自動記述に論点を移していくべきであろう。自動記述については、そもそも『シュルレアリスム宣言』において示されているシュルレアリスムの定義自体が自動記述を意味するものであること、『シュルレアリスム宣言』の巻末にはその「明白な証拠」(PI p.341)として『溶ける魚』のテキストが添えられていることが言える。ところが『シュルレアリスム宣言』においてはこの<第二状態>についての記述はあまりなく、「シュルレアリスムの魔術の秘訣」の「シュルレアリスムの作文、あるいは草稿であり最終稿」(PI p.331)において「あなたがし得る最も受け身的、あるいは影響されやすい状態」(PI p.331)と書いてあるくらいなのである。確かにブルトンは「我々は、いかなる濾過作業に従事することなく、我々の作品において自分をかなり多くの反響の無声の集積所、反響が素描する作品の構想に心を奪われることのない控え目な日記装置(下線原文)にしたのである。」(PI p.330)から、特別な才能や技術が必要になるわけでもないのである。それではどう考えていけばいいのか。この点について1922年11月『文学』新シリーズ第6号に発表され、後に1924年に刊行された『失われた足跡』に収録されている「霊媒の登場」に<第二状態>を巡る経緯が順を追って説明されているので辿っていくことにしよう。まずシュルレアリスムという語で何を言おうとしているのかという話で、「この言葉によって我々は夢の状態、今日では境界を定めるのがかなり難しい状態にかなりよく一致するある心霊の自動現象を意味すると合意したのである。」(PI p.274)

この箇所から、我々がこの論考において進めてきた論理の展開が間違っただけではなかったことが明らかとなるだろう。超現実を持ち出してくることが早急であったとしても、夢の状態を追い求めることが自動記述に繋がっていると見ることは正解であったわけだ。次にある箇所は、『シュルレアリスム宣言』において書かれていることといささか重複する。「1919年に、私の関心は、全く一人でいる時に、眠りが近付くと、予め因果関係をそこに発見することができないとしても精神にとって認識できるようになる多かれ少なかれ部分的ないくつかの文に注がれていた。素晴らしく比喩に富んでいて完全に正確な統辞論を持つこれらの文は、私には一流の詩的要素のように思われていた。私はまずそれらを覚えておくだけに留めた。スーポーと私が

それらが作り上げられる状態を自分たちにおいて自発的に再現しようと考えたのは後のことである。そのためには外的世界を無視すれば十分だった。」(PI p.274)

つまりここにおいても<第二状態>について特別な言及はなく、外部を遮断すれば自ずから生じるような印象さえ与えるわけである。あるいはこうも考えられるだろう。つまり<第二状態>を生み出すというようなそれなりの目的意識を持っては、それが邪魔になって<第二状態>など出現しないということである。それは次のことから明らかとなるだろう。「はっきりした目的でその眩きをうまく手に入れる配慮でもってそれを生じさせるようにした後では、最早我々をそう遠くに連れて行くことは決してなかったのである。」(PI p.275)

何かを生み出そうとするとかえって逆の結果になってしまうことから「<シュルレアリスム>に立ち戻ると、私は最近シュルレアリスムを人間的で、文学的な、かなり明確な意志の下に置く意識的要素の領域への侵入はだんだん実り少ない開拓にそれを委ねていると考えるようになってきていた。」(PI p.275) そこでどうしたかと言うと、夢に向かうことになったのである。つまり「同様の観点から、似たような様式化を免除するために、私は速記であって欲しいと思っていた夢の物語(下線原文)の方を選ぶ気にさせられていた。」(PI p.275)

ブルトンにとって自動記述から夢への移行であるが、我々はそれをこの論考においては逆に辿っていたわけだ。この夢の問題については既に見たところであるが、それが何か新しい進展を見せたとは思われない。ブルトンも同様に考えていたわけで、その打開策が必要となるのである。それがこのテキストの題名にもなっている「霊媒の登場」であって、ブルトンは夢から霊媒への移行を次のように説明している。「とりわけ数多くのそして特徴的な資料がないので、問題はほとんど先に進むはずがないように思われていた。そんなわけで問題の第三の解決法(私は後は解説するだけだと確かに信じている)、あまりにそう多くない数の間違いの原因が生じる解決法、その結果最も胸をときめかせるものの解決法がちょうど現われた時には私はその点に関しては最早大したことは期待していなかったのだ。」(PII pp.275-276)

そしてこれが霊媒による自動記述となるのであるが、これは長続きしない。確かにこの方法によるテキストが存在しないのであるから、あまりいい結果をもたらさなかったことは推測できるが、それにしてもである。この経緯についてはブルトンの『対談集』に詳しい。詳細についてはこの『対談集』を参照すればいいのだが、霊媒を利用することが結局のところ危険であったということに尽きるのである。ブルトンは次のように語っているのだ。「それは長い話になるでしょう… 驚いたことには、私たちが 1920 年頃、自動記述に対していくらかの距離を取るために持ち得た理由とは、自動記述をするための睡眠のセッションの頻繁な繰り返しに対して私たちに注意を促したものと同一種類のものなのです。最低限の精神衛生を考慮に入れることがこうして決定されたのです。自動記述の、最初は、過度の使用は、私としては、私を大急ぎで抵抗しなければならなかった憂慮すべき幻覚を引き起こす気分させた結果をもたらしたのです。」(PIII p.482)

つまりここに至って全ての方法が挫折してしまうか、長く続けて成果を得るには適当な方法とは言えないということがわかってしまう。さてそれではこの後どうすればいいのであろうか。

第五章 各テキストにおいて示される愛について

夢を人工的に作り出したり、夢を自在に操ることができるようになれば、それは最早睡眠時における夢とは異なり、現実における夢ということでまさに超現実ということになるのであろうが、夢の研究を通してあるいは自動記述を試みても超現実の成立や出現というわけにはいかなかったのである。アルキエも『シュルレアリスムの哲学』において指摘しているように、「眠りの時代において、現実の世界と想像のその間に橋をかけなければならなかった。今、それらをついにし、そしてそれによって、それらの共通の根源であり、それらの対立の生まれた土地である人間の基本的なまとまりを発見しなければならない。」(PS p.39)

それではどのような方法でもってそれを可能にするかであるが、アルキエは次のような考え方を示す。「人間の内部にある全ての境界に対して、ブルトンは、愛と幸福における自らの希望の名のもとに、精神と欲望の統一性を対比させる。このような結合が、今度は、人間と<世界>の境界の崩壊を引きずり込むに違いなかったとわかるのはたやすいのだが、この境界は科学的理性の所産であるし、感情的な想像力豊かな全ての構築物の拒絶によって現実の世界の客観的確定を企てるものなのである。」(PS pp.39-40)

ところでアルキエの考えによれば、「このように、愛についてのシュルレアリスムの考え方が経験しなければならなかった充実化と不確実性がいかなるものであっても、ブルトンの探究の最初の誘因の一つは愛の中で存在し、愛によって、幸福に出遭いたいという願望であったと思われる。」(PS p.14) のであるから、「愛と幸福における自らの希望」とは結局のところ愛のみ集約されるに違いないのである。1945年に刊行された『秘法 17 番』の最後を「詩、自由そして愛」(PIII pp.94-95) と締め括っているブルトンであるから、「愛」amour がテキストにおいて重要な役割を果たしていることは何ら不思議ではない。実際我々はこの論考を展開していく前提として、ブルトンのテキストにおいて amour を抽出し検討を加えた。その全てをこの論考において提示することは不可能であり、またあまり意味のあることとは思えないのであるが、何らかの統一性を試みていると思われるものについてはそれを明らかにしておきたい。提示するテキストの順序について意味はないのであるが、まずはシュルレアリスムの宣言集について見ていくことにしよう。まず『シュルレアリスム宣言』であるが、amour は 6 箇所あり、他のテキストと比べると少なく、指摘しておく必要のあるものは見当たらない。『シュルレアリスム宣言』に付された自動記述のテキストである『溶ける魚』については全体として 25 箇所あるのだが、指摘しておくべきものとしてはテキスト 7 において「人生が自然現象の再現以外のものに訴えることなく全身の痙攣もしくは回心を引き起こすことが依然としてできる所で生きることが必要だということだ。部屋の中の北極光、それが事実上の一步だ。しかしそれが全てではない。愛があるだろう。我々は愛である最も単純な表現に芸術を還元するだろう。」(PI p.359) またテキスト 16 において「私が睡眠の鳥たちに網を張る時、私は何よりもまず完全な雨の、コトドリがいるように雨鳥の見事な楽園をうまく手に入れれば良いと思う。ある人たちはそれをほのめかしているのが私が近いうちに愛の意識の中に入り込んでいくかどうかだから私に聞かないで欲しいのだ。」(PI p.370) 次にテキスト 18 において「そして私はここにいる、合意よりも純粋なこめかみを持ち、私の物語の持つ光に縛り付けられ、冷淡な愛に覆われ、折れた棒

の幻影に苛まれそして同情心から、唯一の最後の輝きで、私を実生活に連れ戻すよう頼んでいる予言者としているのだ。」(PI p.373) 最後にテキスト 32 において「あなたがたが知らなければいけないこと、それはそこから飛び降りたい気があなたがたにも起こり得る全ての窓の下で愛想のいい小妖精たちが東西南北で愛のものの悲しいシーツを広げているということだ。」(PI p.399)

これらのテキストから読み取れることは、当時のブルトンにとってのまさに関心事であった現実の生の世界、夢と樂園、芸術なり物語なり空想なりが、結局のところ最後には愛に行き着くということなのである。次に『シュルレアリスム第二宣言』であるが、該当箇所は 21 である。特に注目すべきは、ブルトンがこの『シュルレアリスム第二宣言』の終わり近く箇所で、「私はシュルレアリスムの深く、正真正銘の隠蔽を望む。」(PI p.821) と宣言し、それに関する注で愛について述べている箇所である。まずその注は「しかしこの隠蔽にどのようにして取り掛かることができるのだろうかと既に私にお尋ねがあるのは聞いている。」(PI p.821) とした上で、ブルトンは占星術や心霊学に依存することを提唱するのであるが、それに引き続いて「女性の問題は、確かに、不可思議で怪しげなもの全てである。」(PI p.822) とし、愛の問題に言及していくのである。そして「シュルレアリスムの隠蔽の可能性」(PI p.823) が問題なのであるから、「愛を全ての思考の理想的隠蔽の場として理解する」(PI p.823) という立場を明らかにするのである。そしてこの『シュルレアリスム第二宣言』の最後においても「詩人が、彼もまた、見出したと言っていたし、彼が確かに探し求めている愛の鍵、彼はそれを持っているのだ。命に関わる程の生き方をするとか死ぬとかいった一時的な気持ちを超越するかどうかは彼次第でしかないのだ。」(PI p.828)

超現実の探究に限らず、あるいはそれを別個のものとしても、ブルトンにとって女性の問題は重要な関心事であって、それが結局のところシュルレアリスムの実践と重なってくるということが見て取れる。次に『シュルレアリスム第三宣言 発表か否かのための序論』についてであるが、amour については 2 箇所あるものの注目すべき該当箇所はなかった。宣言集のものとしては最後であるが、『吃水部におけるシュルレアリスム』については、該当箇所は 5 つあり、同時に注目すべき点でもあると思われる。具体的には次のように書かれている。「しかしながら、この道の方へ誘導しそこに前進することを可能にする主張する様々な科目とは逆に、シュルレアリスムは男と女の愛において輝く魅惑の問題点を自ら覆い隠そうと試みることは決してなかったのだ。」(PIV p.21)「これらの考えははるかにあまりにも長く否定主義的と見なしてきた、人間性(下線原文)に直面してシュルレアリスム的な態度を理解することを可能にすることを目的とする。(中略)しかしながら、我々がそれを求めるに値し続けてさえいれば、つまり悔しきまぎれだったとしても、まさにその根源にあるこのような愛の概念を我々の中で歪曲してさえいかなかったとすれば、人生の中で、我々がずっと持っている渴望に勝るものは何もあり得ないだろう。(中略)この愛があらゆる点で恋愛の資格に対応する、つまり言葉のあらゆる厳格さにおいて選ばれていること(下線原文)を前提としてさえいれば、それは定義上、最早悪、過誤や罪が問題になり得ないであろう世界の扉を開くのだ。」(PIV pp.22-23)

ここに至って我々はかなりの核心部分に触れているように思われる。ブルトンの言う愛とは

男女間のそれも肉体的な愛が中心であって、個人を越えた普遍的なものへの愛ではない。このような立場はシュルレアリスムの名に反してあまりに現実主義的で快樂に溺れているような印象があるが、いわゆる普遍的なものへの愛というものは理性の産物であって、一見好ましいようでありながらその理性自体が様々な区別を生み出してきたということにブルトンは自覚的なのである。従ってこれを逆に辿って行くならば、そのような区別を生み出している理性以外の道を辿って行くことを考えるならば、愛にしか頼ることはできないと考えることは至極当然のことなのである。次に宣言集を離れて、『ナジャ』に目を向けてみることにしよう。amour が出てくるのは 13 箇所、意外に少ないように思われるが、注目すべき点を指摘しておこう。ブルトンがナジャと別れようとするあたりで、ナジャの世界を理解し得たかどうかについて自問するのであるが、そこで示される考えが次のようなものである。「私の理解している意味における愛のみが——しかし当時は不可解で、ありそうもない、唯一の、驚くべきでそして疑う余地のない愛だったが——結局のところあらゆる試練に耐えられるものでしかあり得ないような愛なら、ここにおいて驚異の実現を可能ならしめることができたであろう。」(PI p.736)

またナジャの物語が終わった後でブルトンはナジャのことを思い出している箇所があるが、その一つとしてブルトンがヴェルサイユからパリに向かう車の中で、ナジャはブルトンの両眼を手でふさぎ、アクセルを踏んでいるブルトンの足を踏みつけて、「果てしない口づけがもたらす忘却の中で、最早恐らくは永遠に、お互いのためにしか存在しないこと、このように全速力で美しい木々を迎えに行くことを望んでいたのだった。」(PI p.748)

この事実に対してブルトンは、「ひどくはっとさせるやり方で、愛についての共通の認識がその時我々を何に責任を負わせていたのか、私に明らかにしてくれたことで少なからず彼女に感謝している。」(PI p.748) と書いている。ここで示されている愛とは存在そのものの融合ということで、つまり人間とは本来あるべき一つの存在であったところ半分ずつになってしまい、片方が本来あるべきもう片方を探し求めて合体するという考えに基づくものだろう。ブルトンの考える愛の究極と言うことになるだろうが、我々がこの論考において探し求めている超現実とはいささか違うようである。次に『通底器』であるが、amour が出てくるのは 25 箇所であるが、注目すべき点は見当たらない。次に『秘法 17 番』を見てみるならば、amour が出てくる箇所は 32 であり、注目すべきところを見ていくと、前提にはブルトンのエリザに対する愛が存在するからであるが、「贖罪の人を欺く支持できないあらゆる思想は別として、実存と本質の融合を最高度において実現するのはまさしく愛によってでありそれのみによってであるし、それを除いては常に不安で敵対したままであるけれども、これらの二つの概念を、完全な調和のうちに曖昧さも残さず、直ちに両立することに成功するのはそれのみである。」(PIII p.48)

ここにおいても愛は二つの異なった概念を融合させ和解させることができるのである。そしてブルトン自身が書いたテキストとしてはこれが最後なのであるが、『狂気的愛』を検討することにしよう。題名それ自体に既に愛が示されているから、当然予測されることではあるが、このテキストに amour が出てくるのは 85 箇所である。注目すべき点を見ていくなら、テキストの VII の部分にある。『狂気的愛』は愛について思考を巡らせたテキストであり、ブルトンの経験に基づく様々な思いが語られることになる。その中で我々が超現実の探求においてまさに

注目すべきであると判断したのは次の箇所である。「私は山の中でのある<至高点>のことを話した。この地点に住み着くことは一度も問題にならなかった。確かに、それ以後は、それは至高ではなくなっただろうし私は、人間であることをやめたということだろう。分別をわきまえてそこに落ち着くことはできないので、私は少なくともそれを見失うまで、最早それを指摘することができなくなるまで、決してそこから引き離されないようにしているのだ。私はこの案内人であることを選択したわけだし、その結果永遠の愛に向かって、私に教え(下線原文)そして教える(下線原文)よりまねな特権を与えていた力の名を汚すことのないよう努めてきたのだ。私は一度もその名を汚さなかったし、私が愛する存在の肉体と朝日を受けた山の頂の雪を絶えず一体にしたのだ。(中略) 私は愛が勝って人生のためにそれが必然的に出遭う敵対的な全てがそれ自身の賛美の中心において溶け合うようなそれ自身の詩的意識にまで達してしまわなければならないと言っているのだ。」(PII pp.780-783)

超現実を探し求める過程において愛の問題に辿り着き、愛を手掛りにしてブルトンのテキストを検討してきたわけであるが、超現実に関して定義らしきものが見受けられる『シュルレアリスム宣言』をまず検討対象とし、それ以後は宣言集を全て見る形を取り、更にはあたかも恣意的に思われるような順序でテキストを選んできたのも、結局のところ『狂気的愛』において示されている<至高点>に最後には辿り着きたかったがためである。ここにおいて超現実理解の最大の手掛りが存在しているに違いない。我々はこの<至高点>に更なる検討を加えたいのであるが、その前に確認の意味も込めてブルトンの『対談集』についても *amour* を手掛りにして検討しておこう。このテキストにおいても *amour* という言葉は数多く用いられていて、54 箇所ある。この中で「この時期において、シュルレアリスムの靈感の大いなる源は従って愛なのですか。」(PIII p.516) という質問に対するブルトンの答えの中で、「私たちの間で非常に高揚したこの愛の概念は、全ての障害を倒す性質のものなのです。」(PIII p.516) という箇所がある。更に「選ばれた愛」について「その愛の犠牲になることを運命付けられている浄化」(PIII p.518) を認める発言をしている。そして更に『狂気的愛』において問題になった「至高点」についても触れているのだ。ここにおいてまず質問者は『シュルレアリスム第二宣言』において提示されている「精神の一点」について説明を求めている。それに対するブルトンの答えは次のようなものである。「私たちを悩ませ失望させる全ての二律背反が解消することを運命付けられているこの<点>、私は『狂気的愛』において、バス・アルプの見事な風景の思い出に、<至高点>と名付けることになるのですが、神秘主義の観点に位置付けられることは全然あり得ないであろうということは言うまでもありません。」(PIII p.525)

そしてこの後、ヘーゲルの弁証法を理論的根拠としていることが説明される。この経緯についてはマルグリット・ボネも指摘しているように(PI pp.1594-1595)、ブルトンが 1931 年から 32 年に滞在したカステラーヌの近くにあるヴェルドンの峡谷として知られている風景から「至高点」と名付けることになったのだが、もとはと言えば『シュルレアリスム第二宣言』において冒頭近くで示されていた「精神の一点」であるわけだし、更に言うならば『シュルレアリスム第二宣言』の終わり近くにおいて示される「そこに留まるのではなくて、死に物狂いにこの境界を目指す以外のことはできない(下線原文)ということが重要なのである。」(PI p.828) の中

の「この境界」でもあるのだ。そしてこの「至高点」と後に呼ばれる「精神の一点」という考えは、ブルトンの思想において本質的とも言える秘教的な方向付けを間違っただけで解釈することにもなるのであるが、ブルトン自身明言しているように、これはヘーゲルの哲学に依拠したものであって、実際ブルトンはオーギュスト・ヴェラの翻訳による『精神哲学』やジョルジュ・ノエルの『ヘーゲル論理学』を読んでいて、頂点とか極限とかいった概念には親しんでいたようである。またこれも同様にマルグリット・ボネが指摘していることであるが(PI p.1624)、その地点に到達することよりもそれを見失わないでいることの方が重要であって、ヘーゲル弁証法に依拠しているとは言いながらも、知的というよりも倫理的な基準として捉えるべきであろうと思われる。そしてこれを可能にするのがブルトンが『狂気の愛』において主張しているように愛によるのであって、二項対立の矛盾の解消は当然のこととして、更には至高点を目指すことになるのである。

第六章 愛と至高点から超現実を探る

我々はこのようにして愛によって至高点へと至るという構図をブルトンのテキストから導き得たのであるが、いささか抽象的な論理展開になったのではないかという危惧もあるので、これまでの経過を整理しながら、より具体的に超現実の探究の過程をまとめてみたいと思う。ブルトンは現実世界を否定し別の世界を志向するのであるが、これは浪漫派にも見られる現象でとり立てて特異なこととも思われない。アルキエの表現を借りればこうである。「修道生活への憧憬のとりこになった、浪漫派の作家たちは旅立ちを、時代色や地方色を、異国情緒を夢見ていた。彼らはだから人間において、別世界に対する願望と、空間と時間において別のところに位置する世界に対する願望とを結び付ける深い関連を明らかにしていたのだ。」(PS p.20)

ところがこのような思いは、例えば外国とか地方とか今現在自分が住んでいる所とは別の所に行けばそれで全て解決というわけにはいかない。そこに行けば、そこもまた現実であることには変わりはないからである。従って、憧れるべき別世界とは現実にあるどこかではなく、例えば夢の世界のような不可思議な世界でなければならないのである。もっともブルトン自身もそうであるように、日々睡眠時に見る夢で充分というわけではなく、夢を器としては受け入れつつ、中身を更に充実させたものとしたという思いに駆られるわけである。ところが『通底器』においても明らかなように、夢を自在に操れるというわけにはいかない。この時点でシュルレアリスムが行き着く所は詩である。ブルトンの考えていた当初の思惑からすれば、明らかに軌道修正と言えるだろう。この点についてアルキエは次のように自らの考えを示している。

「従って、実験的な探究についてはシュルレアリスムは託宣から自動記述へそして自動記述から詩へと向かう、一種の墮落を経験したと懸念し得るのではないか。/このような問いに対して、シュルレアリスムをいわゆる神秘学に結び付けたい人たちは肯定するはずだろうということは疑いない。私は逆にシュルレアリスムの実験の見かけ上の減退とその言語への還元は、墮落ではなくて、詩ということであるその本質への回帰だったと考えている。詩は実際のところ日常の現実の世界と不可思議な夢のそれを結び付ける橋であって、この橋は仮定的な不可思議なあるいは宗教的な独断論でもって言語の中にある超越的なものの記号を解釈することではなくて、

明晰さを維持したい者にとって唯一のものであり続けている。」(PS p.31)

確かに表面上は全く相容れない二つのものを結び合わせることによって、シュルレアリスムのイメージが現出するという試みは、最早試みとしてではなく成果としてシュルレアリスムに帰し得るものだろう。そこに超現実を垣間見ることができると言うことも可能なのである。つまりアルキエも指摘するように、「恐らく実際のところ、自動的な思考がより現実的と言われるのはそれが詩に関与していて、詩は今度は超現実の世界を明らかにするからである。」(PS p.35)

ところがこれで目的達成というわけにはいかないのは、これではあくまで想像力の産物に留まるからであり、現実は見失われてしまっているからである。現実世界を否定するブルトンは、想像の世界に逃避してしまうのではなく、現実世界を変革し、その変革した現実世界から目的のものを見出そうとするのだ。そこで詩によって想像の世界において可能になったものを、この現実において可能にしようとするのである。そしてここにおいて想像の世界と現実の世界の結合をヘーゲルの弁証法的に可能にしなければならないわけだが、これを超現実と言うことが可能なのである。つまりアルキエの言うように、『宣言』において、ブルトンは超現実の世界に<絶対的現実>を認めていて、この世界が彼にとって目に見える世界と想像上の世界の総合をもたらしているように思われる点において今回は当然のことなのである。」(PS p.35)

ところで、この言語の世界において可能になったものをいかにして現実において可能にするか。ブルトンによれば、言語においては全ては可能だと言っても間違いはない。ブルトンは『野をひらく鍵』に収録されている「神秘対不可思議」において、次のように書いている。「逆さまの世界、明白であってもなくても理想郷、楽園の夢想は単純なリアリズムでは取り戻すことができないであろう場所を言語において手に入れたのである。」(PIII p.654)

だからこそブルトンは『通底器』において「私は、私が生きているであろう限りは、常に遠くに一つの島があるだろうということを知っている。」(PII p.179)

これらをあくまで空想の産物であると批判することは可能である。だからこそブルトンはこれを現実において事実として可能にしたいのである。この点についてブルトンは自覚的であって、既に示した『野をひらく鍵』の中の「神秘対不可思議」において次のように締め括っているのである。「言葉がだんだん専ら情意的な角度から評価され、それらの組合せに、ある形式の下で、ある存在のお互いの、深く、独自の連結力が提供され、それどころかまさに言葉でもって<本質を捉えること>を夢見る瞬間から、言語に関する振舞いは愛における振舞いを次第に模範にすると思われるのは明らかだ。」(PIII p.658)

既に見たように現実において相対立する二つのものが矛盾なく感じられるようになることが愛によって可能であり、その愛も理性によって生み出されたかのような普遍的なものへの愛ではなく、ブルトンが言うところの男女間の肉体的官能的な愛なのである。崇高な愛となるともすれば幻想の産物ではないかという疑いも出てくるであろうが、このような肉体的な愛となれば、それこそ凡庸な愛においても可能であって、現実に存在すると言い切ることができるのである。ただこの表現はブルトンにとっては適当なものではなく、ブルトンの言う愛とは唯一の存在に向けられた「選ばれた愛」(PIII p.517-518)なのである。この点については明確にしておかなければならないが、肉体的愛といえども欲望の充足が目的なのではない。アルキエは

ブルトンの自動記述のテキストである『溶ける魚』について次のように指摘している。「従ってシュルレアリスムを突き動かしている欲望を官能的な満足をもたらす欲望に単純化しないことが重要である。それどころか、恋をしている心の高ぶりは、『溶ける魚』においては、それが人間のあらゆる難解さ、あらゆる問題、あらゆる曖昧さを含んでいるからということではか人間のあらゆる探究の唯一の目的として感じられることはないのである。」(PS p.13)『溶ける魚』に限定せずとも、愛がシュルレアリスムの目的にとって重要な役割を果たすことは既に見た通りである。愛という概念を用いるなら、いかに現実的なものであっても抽象的概念のように思われ、本格的に検討していくならば消滅してしまう危険性も感じられるだろうが、愛の対象としての女性たちを捉えるならば歯止めをかけることができるかもしれない。アルキエは同じく『溶ける魚』についての分析の中で次のように書いているのだ。「彼女たちは覚醒と夢の間の関連であり、橋のようなものとしてあり、それらの和解を予想させるように思われる。」(PS p.14)

このように考えるならば、愛というものが単なる幻想ではなく、まさに現実に存在するものであることが理解されるだろう。そしてこのことは必然的に次のことも明らかにするに違いない。つまり全ては外部の世界ではなくて、内部の世界において起こっているということである。この点についてはガブリエル・レイも同様であって、ただしシュルレアリスムに関してどれだけ認識しているかについては疑問の余地を残すが、次のように書いている。「全てのものは人間に内在的であって、<自然>と<精神>、自然的なもの、超自然的なもの、現実的なものと超現実的なもの、全ては人間に統合されるのだ。」(PS p.52) 用語の問題は検討しなければならないだろうが、結局のところ全ては人間の内部にあると結論付けられるわけである。特に相対立するものが矛盾なく感じられる精神の一点とはまさに人間の内部にあるということなのである。もちろんそれが常に既に人間の内部に存在すると考えることは、そもそも何故相対立する二つの概念が生じ得たのかということになり認めることはできないだろう。つまりここで愛が再発見されなければならないわけである。「そんなわけで愛が、ここにおいては情熱恋愛という意味なのだが、ただちにシュルレアリスム的な関心事において、一位を占めるのだ。そこにおいて<宇宙>の全ての威信、意識の全ての影響力、感情の全ての揺れが見られるのである。つまりそれによって主観的なものと客観的なものの最高の総合が行なわれ、そしてシュルレアリスムの分裂を不可能にすると思われていた恍惚が我々に返されるのである。」(PS pp.91-92)

このように愛によって相対立する概念が矛盾なく感じられるようになったとして、超現実はどこにあると考えるべきなのだろうか。ここにおいて我々は、モーリス・メルロ・ポンティに依拠しながら、それは身体の中にあると考えるのである。ブルトン自身明らかにしているように、夢と現実が融合して超現実が生まれるとか精神の一点といったものを考える上で理論的な根拠となっているものはヘーゲルの弁証法である。ところでブルトンは『シュルレアリスム宣言』の終わり近くにおいて次のようなことを書いている。つまり「私は別におけるのと同様にこの領域において、他の全ての人たちの相次ぐ失敗に通じながらも、自分が負けたとは思わず、望むところから出発し、そして道理をわきまえた(下線原文)道以外のあらゆる道を通して、可能なところに到達する人間の純粋にシュルレアリスム的な喜びを信じている。」(PI p.345)

ここにおいてブルトンは理性に依存しないことを明らかにしているのである。ところでヴァ

ンサン・デコンブの『同じものと他なるもの』²⁾によれば、理性的なものが非理性的なものと対立し続けるのが非弁証法的な考えであるが、仮に弁証法的な思考に従うならば、理性が理性以外のものと対立していても、弁証法的な動きをするわけであるから、理性は自ずから別のものにならざるを得ない。ところがこの弁証法を支えているのはまさに理性の働きであって、その理性が全く別のものに変化してしまうならば、弁証法それ自体も崩壊せざるを得ないだろう。これはブルトン自身認めていることであるが、至高点に到達したとしてそこに留まることは人間でなくなるのだとしている。ブルトンは『ナジャ』の「序言」において主観性と客観性の戦いについて触れているが、一方に偏るのではなく、そのどちらでもない間の考え方として「両義性」*ambiguïté* というものがあるのである。そしてその両義性と最も深く関わっている場が、メルロ・ポンティによれば我々の身体なのである。メルロ・ポンティは次のように書いている。「世界は私が思考するものではなくて、私が体験するものであり、私は世界に対して開かれていて、私はそれと疑いなく意思を通じ合っているが、私はそれを所有しているわけではなく、それは汲み尽くせないのである。」(PP pp.xi-xii) このような世界の捉え方として、世界は我々にとって関与し得ない客観的世界として解読しようとする立場と、全ては内面の問題としてその世界を解読していこうとする立場のいずれも退ける立場としてメルロ・ポンティは現象学を支持するのである。「現象学の最も重要な獲得物は恐らく世界や合理性のその概念において極端な主観主義と極端な客観主義とをつなぎ合わせたことだろう。」(PP p.xv)

そしてその中間地点としてつまり世界を捉えていく上での媒体となるのが身体なのである。主体と客体、精神と物体といった二項対立を解消する、あるいはその二項対立自体を無効なものとしてしまう次元として身体があるのだ。身体とは通常例えば物を手で掴んだり、歩いてどこかに出かけたりと物として捉えることが多い。食べたり眠ったりという行為においても生理学的な次元で捉えてしまう。病気になって治療するという場合などそれが顕著なものとなってくる。ところが何かを感じるつまり世界を捉えるという時、それは常に身体的に媒介されているのである。つまり世界を捉える時、身体を媒介にしなければ何も把握できないということから、身体は主題化されるべきなのである。そしてこのように主題化された身体は「身体性」として、主体と客体、精神と物体といった二項対立を生み出していた形而上学的な思考を乗り越えていくわけである。この意味においてメルロ・ポンティの現象学は非弁証法的であるのだが、ヘーゲルの弁証法においても身体が単なる物とは違った特異な存在であるという点については自覚的であって、例えば次のように捉えられているのだ。ヘーゲルをフランスに紹介し、ブルトンらも聴講したとされるコジュエヴの『ヘーゲル読解入門』において「その身体(下線原文)という面から見ると、<人間>は決められた性格を持った自然界の存在で、<自然界との関連>(トポス)を持ちながら<自然>の真っ只中で生きる<特徴的に限定された>動物なのである。」(ILH p.491)

ここにおいて身体とは既にあるものではなくて、対象として認識され作り上げられたものである。例えば実在するものはどのようにして捉えられるかについては次のように説明される。ここにおいてはテーブルが問題になっているのだが、「実際には、この(下線原文)テーブルは私が今話しているテーブルであって、私の言葉はテーブルの四本の脚やテーブルを取り巻いてい

る部屋と全く同じくらいこのテーブルに属しているのだ。確かに、これらの言葉とか、例えば<二次的>と言われる特質のように更に別のものの多くを無視する(下線原文)ことはできる。しかしそうすることで人はその時具体的な現実では最早なく、抽象概念(下線原文)を相手にしているのだということを忘れてはいけない。具体的な<現実の世界>はこの(下線原文)テーブル、それが引き起こした全ての印象、その機会に発せられた全ての言葉等を含んでいるのだ。そして抽象的な<テーブル>というもの(下線原文)はこれらの印象、言葉等と、そして一般的には実際に存在し実際に存在した全てのものと切り離せない結び付きにおいてそしてそれによってしか本当にこの(下線原文)テーブルつまり具体的な現実ではないのである。」(ILH p.485)

従って「ヘーゲルによれば、弁証法的なもの、それは具体的な<現実の世界>、つまり<全体>もしくは全体的な<総合>であり、それどころか<精神>である。」(ILH p.488)

このように考えるならば、我々は超現実を対象として外部世界に設定しなければならなくなる。そうなるアルキエも指摘するように、「もし、実際のところ、超現実を定義するために、我々が超現実的なものそれ自体を目標とするなら、我々はそれを物体に変え、それについて物についてのように話すように仕向けられるだろう。」(PS p.157) 確かにそのような外部世界があれば、我々は安心して超現実に向かうことができる。その意味でブルトンが「シュルレアリスムの非国境的境界」において、城の問題に触れていることも理解できるのである。つまりブルトンは次のように書いているのだ。「このような場合に明らかになる霊媒性の特殊な形式の実現に予定された場所があるのか。そうなのだ、内的な空模様の観測所が存在しなければならぬのだ。私は当然外的世界における、全て整えられた観測所のことを言いたいのだ。それは、シュルレアリスム的な観点から言い得るなら、城の問題(下線原文)だろう。」(PIII p.668)

しかしこのように外部世界を設定すると、再び内部と外部の総合を図らなければならなくなる。そして既に見たように、我々が探し求める超現実とは人間の内部、言い換えるなら身体性の中にあるということなのである。このことは意識を対象として捉えることを意味しない。そういうことをすればアルキエも指摘するように、「逆に、もし我々が超現実的なものの意識だけの記述と研究に着手するなら、我々は心理主義を克服することはないだろう。つまり今度は、我々が物や物体に作り上げることになるのは意識それ自体なのだ。」(PS p.157)

そもそも二項対立を生み出す思考を取るならば、結局のところあれでもなくこれでもない第三項を設定せざるを得ないというヘーゲルの弁証法に言う総合に頼らなければならなくなってしまう。少なくともメルロ・ポンティはこのような立場を取らないのであって、既に数多く存在する二項対立を前にして、身体を媒介として捉えていく立場を取るのである。もちろん身体を媒介にすれば全ては解決というわけではなく、我々がこの論考において問題としている超現実についても常に既に存在するというわけではない。ここにおいて超現実が身体もしくは身体性においていかなる位置にあるかを見ていく必要があるだろう。メルロ・ポンティは『知覚の現象学』において「純粋感覚」というものについて次のような考えを示している。「私はまず気持ちによって、私がつらい思いをしている様態とか私自身の健康状態の逆境とかを理解できるだろう。目を閉じた時間近くに私を取り巻く灰色の世界、夢うつつの時に<頭の中で>響いている音は純粋感覚がどういふものであり得るかを告げているわけだろう。私が感じ取るのは私が感じら

れたものと合致し、それが客観的世界において位置することをやめそしてそれが私にとって何も意味しないという厳密な点においてであろう。(中略) 純理論的な感覚作用は未分化の、瞬間的で局部的な<衝撃>の試金石だろう。」(PP p.9)

これがブルトンの言う精神の一点かと思わせるが、このような概念は実際にはあり得ないと断言している。それならば、つまりヘーゲルの弁証法に言う総合によらずに二項対立がそれとして感じられなくなる場合とは果たしてどのような場合なのであろうか。メルロ・ポンティは超現実的なものを提示しそれについて言及しているわけではないが、少なくともそれに至る過程において次のような立場を明らかにしている。「我々の確固とした目的はそれによって我々が我々のために空間、物体あるいは道具を存在せしめ、認知する第一義的な機能を明らかにし、身体をこの適応の場として説明することである。」(PP p.180)

とは言うもののこれは困難な作業でもあって、対象となるものは物として存在し始めることになるし、我々の側としても認識論の主観が出現し、それらの対立が生まれるからである。メルロ・ポンティはこういった対立を弁証法的に総合するのではなく、既に指摘したように両義性として捉えるのである。そして少なくとも次のことは言えるだろう。「身体的下部構造に基礎を置かない<精神的な>行為は一つも見出すことができないだろうということである。」(PP p.493)

そして愛によって全ては矛盾なく捉えられるとするなら、超現実とはまさに身体にあり、身体は「一つのユートピア」として捉えることが可能になるだろう。

終章

我々は以上の論考から愛によって精神の一点もしくは至高点を発見もしくはそこに到達することを可能にし、それを可能にする場所としての身体に超現実を見出すとしたわけである。ブルトンのテキストを仔細に検討するならばそのように推論できるわけであり、ヘーゲル、ニーチェ＝ドゥルーズ、メルロ・ポンティの哲学に依拠することも可能であったのだ。それは確かにそうなのであるが、逆に言うならば我々は愛を万能のものとしすぎたのではないかという反省がある。事実アルキエは次のように書いているのだ。「ところでブルトンはあくまで主張するのだが、<愛の外に解決はない>。しかしもし愛がそれが何の愛であるかを知らないとすれば、人は愛だけで満足することができるのか。愛しか対象としていないとするなら、『溶ける魚』が表現していた希望は不在しかつかまえることなく、非現実の夢の中で挫折する恐れがあるのではないか。」(PS p.103)

愛に対して懐疑的な立場を取らずとも、愛以外の方法によって我々の身体において超現実を認識することが可能なのではないかという考えがここにおいて生じてくるのである。それは「幸福」という概念であって、これはブルトンのテキストにおいて確実に存在する概念なのである。もちろんブルトンにあっては幸福は愛によって愛のみによって可能であるとする考えに至ることもまた当然であって、我々は愛をこの論考において結論とともに提示することも充分可能なのである。例えばブルトンは『ナジャ』の「序言」において主観性と客観性の戦いについて言及しているが、その中で「主観性の最大の幸福——私にとって更に大事であり続けるもの」(PI p.646)という表現を使っているのだ。ちなみにそれは愛ではないのであるが、ブルトンにとっ

て『シュルレアリスム宣言』において指摘している「惨めな暮らし」(PI p.313)による「夢と欲望にとって必要不可欠な要請に放棄を求める、限られていて慎重な幸福の計算ずくで計算高い探求」(PS p.18)ではなく、アルキエが『溶ける魚』の分析に関連して述べているような幸福なのである。「しかし『溶ける魚』を絶えず突き抜ける稲光は確かに幸福の正確な様相であり、幸福が生じさせる恍惚と驚異的な心の高ぶりとともに、そこから幸福を見ることができるといえる裂け目なのである。」(PS p.19)

もっともこのアルキエにして「ブルトンは幸福を見出したい、そして愛によってそれを見出したいと思う」(PS p.19)と書いているわけであるから、結局のところ愛に帰することになるのだ。これと同様のことは『ナジャ』の第三部において見られるのであって、ブルトンはナジャの物語を書き上げた後、その後の部分を書き上げて『ナジャ』として提示することを可能にしたのであるが、それを可能にしたのは「希望」であると書いている。そしてここにおいて「希望」とは何に対する希望かということになるが、ちょうどこの執筆時期にシュザンヌ・ミュザールと出会っていて、結局のところそれは愛に関するものであるのだ。ところがブルトンのテキストを前にして愛によって捉えることのできないものが存在するのも事実であって、例えばそれは『通底器』において次のように書かれた箇所である。「大部分の人たちにとって、牛乳配達人の車の走る音がするとすぐ現われるのをやめる、これらの数え切れない可能性を考慮に入れることを拒否するならどのようにして自分が見たり、聞いたり、触れたりできると思うのか！主観性の漠然とした本質、この広大な領域そして全ての中で最も豊かなものは耕されずに残されているのだ。(中略)このようにして主観性に関して、いくらかの価値のある生きた資料を、意のままにするために我々が持っている最後の機会が失われるのだ。私としては、このような状況において、少しずつこの欠落を埋めるために、詩人たちはしか——彼らは依然として何人かいるのだが——ほとんど当てにせざるを得ないのだ。」(PII p.205, pp.207-208)

この主観性を明らかにしていくためには、「客観的思考の偏見」(PP p.370)があれば不可能である。メルロ・ポンティの表現を借りれば「外部に現われる内部、世界の中に降りてそこで存在し始めそして順番に視線でそれを探し求めることでしか十分に理解できない意味作用。このように物は私の身体のそしてより一般的には私の身体がその安定させられた構造でしかない私の実存の相関語でしかない。」(PP p.369)

このように考えるならば、我々は我々の身体の中に深く入り込んでいかなければならない。確かに外的世界との関係において主観性を意識するということもあり得るだろうが、恐らくそれは他者を通して避けるために回避されるべきものだろう。この主観性を明らかにするというこのために必要なものは、ブルトンの表現によれば「私の中に引き起こしていた心身の状態」(PII p.679)であり「このような完璧に影響されやすい状態」(PII p.679)である。あるいは『シュルレアリスム宣言』の最後において、シュルレアリスムが現実世界の告発に関与するとしつつも一方で、「シュルレアリスムは、逆に、我々が現世で辿り着ければいいと確かに思っている完全な放心状態しか正当化できないだろう。」(PI p.346)と書かれているように、「完全な放心状態」である。そしてこのことを通して、愛によらずとも相対立する二項が矛盾なくというよりもむしろ何の境界もなしに感じられる精神の一点に遭遇できるはずなのである。もちろんこ

れが容易なことではないというのもまた事実なのであるが、重要なことは超現実をどこにおいて求めるかという場所の見定めなのである。詩においてシュルレアリスムのイメージを現出させることに関して本来なら全く相容れない二つの言葉を結び付けることによって可能になるという技法上の問題は明らかになっていても、実際にそこにシュルレアリスムのイメージが現出するかどうかは全く偶然によるのであって、そこまで意図的計算づくめではないのだ。むしろ計算できるとするならば、シュルレアリスムの効果というものは半減してしまうか消滅してしまうだろう。これと同様に超現実が存在するかどうかは全く偶然によるものだと考えるならば、我々にとって重要であるのは超現実が成立する場所なのである。この点についてブルトンは明確にしているので、『対談集』の中にあるブルトンの発言を書き記しておこう。ブルトンは自動記述についての質問に対して次のように答えているのだ。「最も重要な点は無意識的な作品の雰囲気(下線原文)が感じられたということ、植物相と動物相が特にすぐにそれとわかり、でもとりわけ全てにとって見たところ同じである構造(下線原文)が、明らかにされることしか求めないある地方を靈魂が風の便りで知ったということなのです。非常に難しい点はめいめいが自分自身のためにこの認識を試みる気にさせること、この地方は別の所に(下線原文)あるのではなくて、自分の中にあるということとその人に納得させることそしてそこに至る橋を渡るのに十分軽い歩みをするように、全ての荷物を放り出す決心をその人にさせることなのです。特殊な規律を自分に強いることなくそしてボタンを押せば十分であったかのように、人は遅かれ早かれこのもう一方に好きな時に渡りそれとともに同じ様に好きな時にここを通過して戻って来る方法を見出すだろうと私には思われたのです。」(PIII p.479)

アルキエが「超現実的なものを定義することは非常に困難なままである。」(PS p.157)としていて、それは確かにそうではあるのだが、言い方を変えるならば、定義付けとして言葉で明確に表現することは確かに困難ではあるのだが、超現実を体感することは思っている以上に困難ではないのではないかと我々には思えるのである。もちろんアルキエもまた指摘していることであるのだが、「超現実的なものが対応する意識が物思いに耽る状態を拒否し、そしてこの自由、この自由闊達さを維持しなければならない」(PS p.157)というのは困難であって不可能とさえ言えるだろうが、つまり超現実なるものを常態化させるということは我々がこの現実中存在し生活している以上あまり必要なことでもなく、事実望むと望まざるとに拘らず不可能なことではあるのだが、たとえ一時的にせよそれを体感することは極めて意味のあることだと思われる。「そんなわけで人は超現実的なものがシュルレアリスム的な意識の目的であると言い得るのである。」(PS p.156)そしてそのためには何をしなければならないか。超現実とは人間の内部にあって、ただし常にそこにあるというわけではなく、一種の気分のように不安定で曖昧な存在ではあるが、ある種の精神の状態であり、また物として人間の内部にあるという客観的事実によって明らかにされるのではなく、主観と客観の双方を揺れ動くような両義的なものであって、両義的であり続ける他ないのであるが、だからといって外部世界に働きかける必要があるというわけではなく、ただひたすら受容の状態にあるものなのである。従って我々に可能でありかつ必要であるのは、ブルトンが『シュルレアリスム第二宣言』において、「シュルレアリスムの理念は単に我々の精神的な力の完全な回復を目指すのだ」(PI p.791)と書いているように

「精神的な力」なのである。精神的な力を取り戻すためには、ブルトンによれば、それは愛によって可能になるということであろうし、更には愛も含めて「詩、自由そして愛」が必要不可欠ということにもなり、また「私はそれでも尚、とりあえずは、私の人生を様々な思想に費やすことを目的とするだろう。」(PI p.261)と書いているように思想かみしれず、いずれにせよ幸福を感じさせる状態として捉え得るものである。

注

1)引用文の後の括弧の中に示されている略記号は、以下の文献を示している。尚、引用文については全て筆者が訳出したものである。

(PI) André BRETON, *Œuvres complètes I*, Bibliothèque de la Pléiade, Gallimard, 1988

Les pas perdus, pp.191-308, 1924

Manifeste du surréalisme, pp.309-346, 1924

Poisson soluble, pp.347-399, 1924

Nadja, pp.643-753, 1928

Second manifeste du surréalisme, pp.775-828, 1930

(PII) André BRETON, *Œuvres complètes II*, Bibliothèque de la Pléiade, Gallimard, 1992

Les vases communicants, pp.101-215, 1932

Point du jour, pp.263-392, 1934

Position politique du surréalisme, pp.409-500, 1935

L'amour fou, pp.673-785, 1937

(PIII) André BRETON, *Œuvres complètes III*, Bibliothèque de la Pléiade, Gallimard, 1999

Prolégomènes à un troisième manifeste du surréalisme ou non, pp.3-15, 1942

Arcane 17 enté d'AJours, pp.35-113, 1944-1947

Entretiens 1913-1952, pp.423-649, 1952

La clé des champs, pp.651-959, 1953

(PIV) André BRETON, *Œuvres complètes IV*, Bibliothèque de la Pléiade, Gallimard, 2008

Du surréalisme en ses œuvres vives, pp.17-25, 1955

Le surréalisme et la peinture, pp.345-846, 1965

(PP) Maurice MERLEAU-PONTY, *Phénoménologie de la perception*, Bibliothèque des Idées, Gallimard, 1945

(NP) Gilles DELEUZE, *Nietzsche et la philosophie*, Bibliothèque de philosophie contemporaine, puf, 1962

(ILH) Alexandre KOJÈVE, *Introduction à la lecture de Hegel*, Bibliothèque des Idées, Gallimard, 1968

(PS) Ferdinand ALQUIÉ, *Philosophie du surréalisme*, Flammarion, 1977

2) Vincent DECOMBES, *Le même et l'autre, quarante-cinq ans de philosophie française(1933-1978)*, collection «critique», Les Éditions de Minuit, 1979

加藤 彰彦

Interpretation of the surreality in André BRETON from the physical point of view

Akihiko KATOH